

# 思いや意図をもって表現を工夫する力を育成するための音楽科指導の在り方 — 器楽の学習における振り返りを充実させた題材モデルの作成を通して —

東広島市立平岩小学校 弓場 紫奈子

## 研究の要約

本研究は、思いや意図をもって表現を工夫する力を育成するための音楽科指導の在り方について考察したものである。文献研究から、本研究における思いや意図をもって表現を工夫する力を「こう表現したいといった自分の明確な考えや願いをもち、音楽を形づくっている要素の働かせ方を試行錯誤しながら、曲想にふさわしい表現をつくり上げていく力」と定義した。この力を育成するために、児童のメタ認知の働きを効果的に促すことができるKPTの視点を活用した振り返りシートを工夫し、題材モデルを作成し、指導を行った。その結果、児童に音楽を形づくっている要素の働かせ方を試行錯誤させながら、表現の工夫をさせ、思いや意図をもって表現を工夫する力を育成することができた。以上のことから、器楽における振り返りを充実させた題材モデルは、思いや意図をもって表現を工夫する力を育成するために有効であることが明らかになった。

**キーワード：思いや意図 振り返り KPT 題材モデル**

## I 問題の所在

国立教育政策研究所における「小学校学習指導要領実施状況調査 教科別分析と改善点（音楽）」（平成27年）では、表したい思いを選択し、それにふさわしい器楽の表現を工夫し、音楽表現に対する意図をもつ問題の通過率は62.1%であった。この問題は、選択肢を伴う問題であり、選択肢がない場合にはさらに通過率が低くなることが予想される。思いや意図を表現の工夫につなげることができないことが課題だということが分かる。また、同調査、教師質問紙調査において、「表現の学習で、児童が音楽表現に対する思いや意図をもつように指導していますか」という質問に対して、肯定的な回答は87.9%である。一方、児童質問紙調査（第6学年対象）において、「歌ったり楽器を演奏したり音楽をつくり出すときに、自分はこう表したいという願いや考えをもつようにしていますか」という質問に対して肯定的な回答は63.6%と、教師と児童の意識には差違が見られた。これは、児童の思いや意図が明確でないまま、教師が授業を進めていると考えられる。

稿者のこれまでの器楽の授業においても、技能習得に重きを置き、教師主導で授業を行うことが多く、児童一人一人に明確な思いや意図をもたせないまま、表現活動をさせていた。

そこで、本研究では、思いや意図をもって表現を

工夫する力の育成を目指す。

## II 研究の基本的な考え方

### 1 思いや意図をもって表現を工夫する力とは

#### (1) 「思いや意図をもつ」とは

小学校学習指導要領解説音楽編（平成20年、以下「解説」とする。）の、第5学年及び第6学年における目標（2）には「基礎的な表現の能力を高め、音楽表現の喜びを味わうようにする。」<sup>1)</sup>、内容「A表現」の指導事項（2）イには、「曲想を生かした表現を工夫し、思いや意図をもって演奏すること。」<sup>2)</sup>と示されている。

解説には「『思いや意図をもって演奏する』とは、表現に対する自分の明確な考えや願い、意図をもって演奏するということを意味している。」<sup>3)</sup>と示されている。大熊信彦（2015）は「音楽教育の目標の真の実現」の図の中で、「思いや意図をもつ」とは、このようなイメージや思いを表したいから、このように歌いたい、演奏したい、音楽をつくりたいといった自分の考えをもつことと示している<sup>4)</sup>。

これらのことから、「思いや意図をもつ」とは、こう表現したいという自分の明確な考えや願いをもつことと捉える。

## (2) 「表現を工夫する」とは

「表現を工夫する」ことについて、中学校学習指導要領解説音楽編（平成20年）の第1学年の内容「A表現」の指導事項（2）アには、「『表現を工夫して演奏する』とは、表現したい思いや意図をもち、要素の働かせ方を試行錯誤し、よりよい表現の方法を見いだして演奏することである。」<sup>4)</sup>と示されている。

松本徹(2009)は、「表現を工夫するとは、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みのかかわり合いを感じ取って、曲想にふさわしい表現を試行錯誤しながらつくり上げることである。」<sup>5)</sup>と述べている。

小原光一(2008)は、「子どもたちは授業の中で〔共通事項〕を操作することによって、音楽を美しく豊かにしているのは〔共通事項〕の『音楽を形づくっている要素』の働きだと明確に感じ取ることができます。そして、別の教材になっても、別の活動の学習でも、それらの要素を手掛かりにして曲のよさを一段深いところで見つけ、さらに豊かな表現を意図をもってつくり上げていくことができるようになるのです。」<sup>6)</sup>と述べており、音楽を形づくっている要素を手掛かりにすることにより、豊かな表現につながる事が分かる。

そこで、「表現を工夫する」とは、音楽を形づくっている要素の働かせ方を試行錯誤しながら、曲想にふさわしい表現をつくり上げていくことと捉える。

## (3) 「思いや意図をもって表現を工夫する力」とは

(1) (2)の内容を踏まえ、本研究において、「思いや意図をもって表現を工夫する力」とは、こう表現したいといった自分の明確な考えや願いをもち、音楽を形づくっている要素の働かせ方を試行錯誤しながら、曲想にふさわしい表現をつくり上げていく力と考える。

## 2 器楽の学習における振り返りについて

器楽の学習過程について、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 音楽】（平成23年）の事例を基に、図1のように整理する。この事例は、題材名「祭りの音楽に親しもう」において、学習カードを用いて、表現の工夫を考えさせることで、思いや意図を高めさせた事例である。事例の学習カードの記述の内容は「工夫してみたところ」「工夫の結果」「次の時間に向けて」の観点となっており、授業の終末に学習カードに記述させ、振り返りを行わせることで、児童に明確な思いや意

図をもたせ表現の工夫をさせた事例である。図1の表現を工夫する学習過程においては、音楽を形づくっている要素の働かせ方を試行錯誤させながら学習を進めさせ、振り返らせることで思いや意図を明確にさせている。

このことから、思いや意図をもって表現を工夫する力を高めさせる手立てとして、器楽の学習において振り返りの充実を図ることが有効だと考えた。

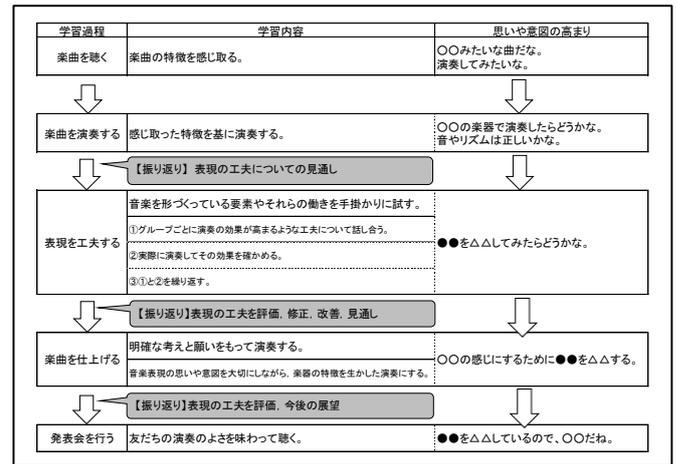


図1 器楽における学習過程と振り返り

## 3 振り返りの充実について

### (1) 振り返りとメタ認知

振り返りが思いや意図をもたせる手立てとなるためには、授業の感想のように漠然としたものを書かせるのではなく、振り返る視点を明確にして行う必要がある。市川伸一(平成26年)は「振り返りとは、認知心理学でいうところのまさに『メタ認知』なのですが、自分の理解状態を自分で診断するという意識をもってほしいと思っています。」<sup>7)</sup>と述べている。

植友友理(2010)は、メタ認知とは、みずからの知的な活動を一段上から客観的にとらえ、行動を調整することであると述べている<sup>(2)</sup>。また、三宮真智子(2008)はメタ認知をメタ認知的知識とメタ認知的活動の二つに分け整理している。本研究では、メタ認知的活動の部分を取り上げ、図2のように示す。図2のメタ認知的モニタリングとメタ認知的コントロールについて、市川(1996)は「メタ認知的モニタリ

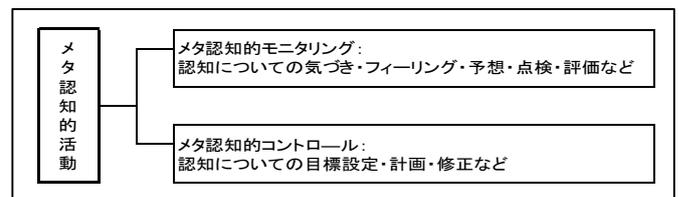


図2 メタ認知的活動の分類<sup>8)</sup>

ングには『ここが理解できていない』といった、認知についての『気づき (awareness)』, 『なんとなくわかっている』といった『感覚 (feeling)』, 『この問題なら解けそう』といった『予想 (prediction)』, 『この考え方でいいのか』といった『点検 (checking)』, 『よくできている』といった『評価 (evaluation, assessment)』などが含まれると考えられる。また、メタ認知的コントロールには、『完璧に理解しよう』といった、認知の『目標設定 (goal setting)』, 『簡単などころから始めよう』といった方略をはじめとする『計画 (planning)』, 『この考え方ではだめだから、別の考え方をあてはめよう』といった『修正 (revision)』などが含まれると考えられる<sup>9)</sup>と述べている。

このような視点で振り返りを行うことは、図1に示すような思いや意図の高まりに有効であると考えられる。よって、振り返りをメタ認知的活動の側面で見え、振り返りを充実させる。

## (2) KPT (けふと) を活用する

本研究では、メタ認知的モニタリングとメタ認知的コントロールの二つの働きを簡易的に且つ効果的に取り扱うため、KPTを活用する。

天野勝 (2013) は「KPTとは、ふりかえるのに適した思考フレームワーク (視点) で、『Keep』『Problem』『Try』という3つの単語の先頭文字をつなげたもの

です<sup>10)</sup>と述べている。図3はKPTの基本のフォーマットである。KPTの視点の「Keep」は、実践した活動の中で行っていたことや、今後継続したいことや、よかったこと、「Problem」は実施した活動の中で、困ったことや、問題点、「Try」は今後の活動で試したいことの三つであり、「Keep」と「Problem」を整理し、そこから

「Try」を導くようになっている。(1)で述べたメタ認知的活動を踏まえ、本研究で用いるKPTの視点を照らし合わせると、「Keep」と「Problem」はメタ認知的モニタリング、「Try」はメタ認知的コントロールの働きをもつものと考えられる。天野は、KPTは企業においてチーム内の問題意識を統一し、その問題をチーム全体で解決していくことができるシンプルなフレームワークであり、チームメンバーの相互作用を生み出すツールとして役立つと述べている<sup>(3)</sup>。本研究では、器楽における学習でグループ

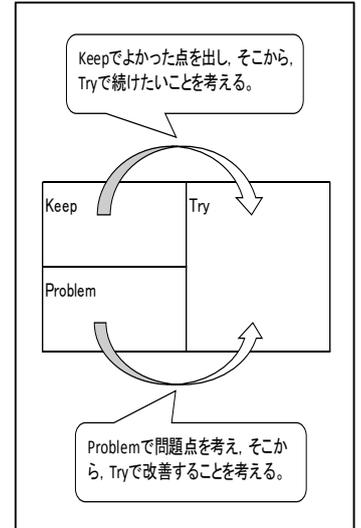


図3 基本のフォーマット

図4 振り返りシート (KPTシート)

活動を行う際にKPTを活用する。児童には、表現の工夫について限られた三つの視点で振り返らせることで、明確な思いや意図をもたせることができると考える。また、KPTは、個の思いや意図を効率よくグループで交流させることができ、短時間で思考を深めさせたり、表現の工夫について新たな発想を引き出したりすることが期待できる。天野は、「このKPTを使ったふりかえりの素晴らしいところは、『繰り返して行うことでその効果がより大きくなる』ところにあります。」<sup>11)</sup>と、継続的に行うことが効果的だと述べている。

そこで、本研究でKPTを活用するに当たっては、次のア・イを工夫する。

### ア 振り返りシートについて

振り返りシートは、KPTの視点を活用し、図4

に示す振り返りシートを作成する。津川裕（平成22年）は、子供一人一人が問題解決への見通しをもって、解決への道筋を自分で確認することができるような手立てが必要であり、その手立てとして解決すべき問題と解決の道筋を連続して記述できるワークシートの作成を挙げ、毎時間、記入するようにすれば、問題意識を連続させる学習を展開できると述べている<sup>(4)</sup>。

このことから、振り返りシート（KPTシート）は曲を練り上げていく道筋が視覚的に確認できるように、図4の振り返りシートに記述させる。振り返る三つの視点はKPTの視点を活用して「Keep：よかった表現の工夫」「Problem：うまくいかない表現の工夫」「Try：改善する表現の工夫、試したい表現の工夫」とし、振り返りシートは、個人で使用す

時	学習内容	KPTサイクルタイム	児童の思いや意図の高まり			
第一時	楽曲を聴き、音楽のよさや面白さを聴き取り、感じ取る。		「〇〇の感じの曲にしたい。」			
第二時	グループに分かれて「楽器の組合せ」を考え、練習をする。	<p><b>KPTサイクルタイム(振り返り)</b></p> <p>〈振り返りの視点〉 Keep: よかった表現の工夫 Problem: うまくいかない表現の工夫 Try: 改善する表現の工夫 試したい表現の工夫</p> <p>【KPTシート】個人 A班 B班 C班 D班</p> <p>① KPTシートと付箋を使って、個人で三つの視点で振り返る。</p> <p>② ①で書いた付箋を使って、KPTボードを使って、グループで交流する。</p> <p>③ KPTボードにグループのTryをまとめる。</p>	音色	旋律	強弱	
第三時	グループごとに楽曲を合わせたり、「旋律の重なり」を工夫したりする。	<p><b>今日のTry</b></p> <p>【指導上の留意点】 教師がグループのKPTシートを整理し、クラス全体で指導する内容とグループで改善していく内容をまとめ、次時の指導に生かす。</p> <p><b>KPTサイクルタイム(振り返り)</b> 第二時で行ったKPTサイクルタイムの流れを繰り返す。</p>	「〇〇の感じにするために△△の楽器にしよう。」	「うまく合う部分とうまく合わない部分がある。」 「みんなの拍が合っていない。」 「ゆっくり合わせてみよう。」 「〇〇の感じにするために△△の楽器と▲▲の楽器の旋律の重なりはよかった。」 「△△の楽器の音が聞こえるように、強弱をつけてみよう。」		
第四時	「旋律の重なり」「強弱」を工夫し、よりよい表現に向けて表現を工夫し、楽曲を仕上げる。	<p><b>今日のTry</b></p> <p><b>KPTサイクルタイム(振り返り)</b> 第二時で行ったKPTサイクルタイムの流れを繰り返す。</p>	「〇〇の感じにするために△△の楽器でよかった。」 「〇〇の感じにするために△△の楽器は合わない。」 「〇〇の感じにするために△△の楽器を◇◇の楽器に変えてみよう。」	「〇〇の感じにするために△△の楽器と◇◇の楽器の旋律の重なりはよくなった。」 「〇〇の感じにするために△△の楽器と◇◇の楽器の旋律の重なりを変えてみよう。」	「△△の楽器の音が聞こえるように、強弱をつけてみよう。」	
第五時	明確な思いや意図をもって演奏する。友達の演奏のよさを味わって聴く。	<p><b>KPTサイクルタイム(振り返り)</b></p> <p>【KPTシート】個人 ① 友達の発表を聴いて、よかった表現の工夫について記述する。 【KPTシート】個人 ② 自分の発表について、自分がこだわった工夫について、振り返る。</p>	「〇〇の感じにするために演奏の仕方を変えてみよう。」 「〇〇の感じにするためにこばちを変えてみよう。」 「〇〇の感じにする音の高さを変えてみよう。」	「旋律の重なりを変えると、主な旋律と飾りの旋律のバランスがよくなった。」 「低音やリズムが重なり、主な旋律が聞こえなくなった。」 「主な旋律と飾りの旋律、低音、リズムの音のバランスを変えてみよう。」 「うまく合わせられるようになってきた。」	「〇〇の感じにするために強弱を●●したのはよかった。」 「強弱を●●したのは〇〇の感じになっていない。」 「〇〇の感じにするために強弱を●●しよう。」	
			「〇〇の感じにするために●●を△△する。」			

図5 振り返りを充実させた題材モデル

## イ 学習形態について

振り返りの場面での自己評価や相互評価の活用の有効性について、佐藤真（平成26年）は、「振り返りは、個人的に正当できれば効果はあるが、個人での振り返りは量的にも質的にも目標との差違や基準の解釈によっては状況把握が揺らぐものである。したがって、子供同士による相互評価を活用し、自己評価との相違について、その理由や根拠を話し合うことで、振り返りは充実する。」<sup>12)</sup>と述べている。このことから、本研究における振り返りは、個の振り返りで終わらせるのではなく、個の振り返りを友達と交流させ、話し合わせることで、新たな発想を引き出し、児童の考えを広げさせたり深めさせたりして、明確な自分の思いや意図をもたせることにつながると考える。グループで振り返りを行うツールとして、図6のKPTボードを使う。

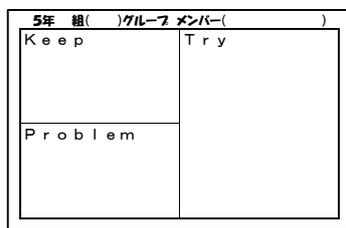


図6 KPTボード

以上のことから、本研究では、ア・イを工夫することで、振り返りを充実させる。

## 4 「題材モデル」の作成について

本研究で作成する題材モデルを、図5に示す。題材モデルでは、振り返りの時間を「KPTサイクルタイム」として位置付け、振り返りには振り返りシートと学習形態を工夫する。

「KPTサイクルタイム」の流れは、図5に示すように、①個人でKPTの三つの視点で振り返り、視点ごとに付箋に書く。②①で書いた付箋を図6に示すKPTボードに貼りながら、グループで交流する。③付箋を貼ったKPTボードを使って、グループのTryを考える。

教師は、「KPTサイクルタイム」でグループごとにまとめたKPTを整理し、クラス全体で指導する内容とグループで解決させる内容にまとめ、次時に今日のTryとして指導に生かす。

児童の思いや意図の高まりについては、授業で取り扱う音楽を形づくっている要素を取り上げ、要素ごとの思いや意図の高まりを示した。

## Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

### 1 研究の仮説

器楽の学習における振り返りを充実させた題材モデルを作成し、題材モデルに基づいた指導を行えば、振り返りが次の学びにつながり、思いや意図をもって表現を工夫する力を育成することができるだろう。

## 2 検証の視点とその方法

検証の視点と方法を表1に示す。

表1 検証の視点と方法

視点	検証の視点	方法
視点1	○思いや意図をもって表現を工夫する力を育成することができたか。	事前・事後のアンケート 事前テスト 事後テスト
視点2	○振り返りを充実させた題材モデルは、思いや意図をもって表現を工夫する力の育成に有効であったか。	KPTシート 事前・事後のアンケート 行動観察

## Ⅳ 研究授業について

### 1 研究授業の概要

- 期間 平成27年6月22日～平成27年7月10日
- 対象 所属校第5学年（2学級52人）
- 題材名 いろいろな音のひびきを味わおう
- 目標  
音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、曲想にふさわしい器楽表現を工夫する。
- 指導計画（全9時間）

次	時	教材	学習活動
第一次	第一時	アイネ クライネ ナハトムジーク第1楽章 双頭のわしの旗の下に	「アイネ クライネ ナハトムジーク第1楽章」と「双頭のわしの旗の下に」を聴き比べながら、楽曲の特徴を捉える。
	第二時	小さな約束	「小さな約束」の特徴を感じ取ってリコーダーで旋律を演奏する。
第二次	第三時	小さな約束	グループに分かれてリコーダーで二部合奏の練習をする。
	第四時	小さな約束	「旋律」「強弱」を工夫し、よりよい表現に向けて、楽曲を仕上げる。
第三次	第五時	リボンのおどり	「リボンのおどり」の特徴を感じ取って、リコーダーで主な旋律、副次的な旋律を演奏する。
	第六時	リボンのおどり	グループに分かれて楽器の組合せを考え、「音色」を工夫する。
	第七八九時	リボンのおどり	「旋律」「強弱」を工夫し、よりよい表現に向けて楽曲を仕上げる。友達の演奏のよさを味わって聴く。

## 2 教材について

本研究で扱う教材は、音色、強弱、旋律を捉えやすく表現の工夫ができる楽曲を選択した。使用した教材については、表2に示す。

表2 教材について

楽曲 (作曲者)	楽曲の特徴
アイネ クライネ ナハトムジーク第1楽章 (モーツァルト)	弦楽合奏の楽曲で、全パートが同じ旋律を演奏したりそれぞれのパートに分かれたりしており、旋律の重なり合うひびきの面白さを感じ取りやすい。
双頭のわしの旗の下に (J.F. ワーグナー)	吹奏楽の楽曲で、木管楽器、金管楽器、打楽器の音色のひびきの面白さを感じ取りやすい。
小さな約束 (佐井孝彰)	リコーダー二重奏に編曲されており、旋律の重なり的美しさを感じながら演奏することができる。
リボンのおどり (メキシコ民謡)	7つのパートで構成されている合奏曲で、楽器の組合せ、旋律の重なり、強弱を工夫しやすい。

## V 研究授業の結果分析と考察

### 1 思いや意図をもって表現を工夫する力を育成することができたか

#### (1) 事前・事後テストによる分析

事前・事後テストでは、「パフ」と「聖者の行進」の楽曲を取り上げる。この二つの楽曲は音色、強弱、旋律が聴き取りやすく、楽器の組合せや強弱を工夫することができ、今回授業で扱う音楽を形づくっている要素の働きと同じである。事前・事後テストでは、楽曲「パフ」と「聖者の行進」の合奏曲を聴いて、どんな感じの合奏曲にしたいのか、そのためどのような工夫をするのか考えさせた。表3は、事前・事後テストの判断基準である。

表3 記述した思いや表現の工夫を検証する判断基準

A 十分満足できる	①どんな感じの曲にしたいかの自分の表したい思いを書いており、記述に妥当性がある。 ②音楽を形づくっている要素の言葉を用いて曲想にふさわしい表現の工夫を二つ以上書いている。
B おおむね満足できる	①どんな感じの曲にしたいかの自分の表したい思いを書いており、記述に妥当性がある。 ②音楽を形づくっている要素の言葉を用いて曲想にふさわしい表現の工夫の一つ書いている。
C	Bの①②の判断基準について、一つ以上が到達していない。

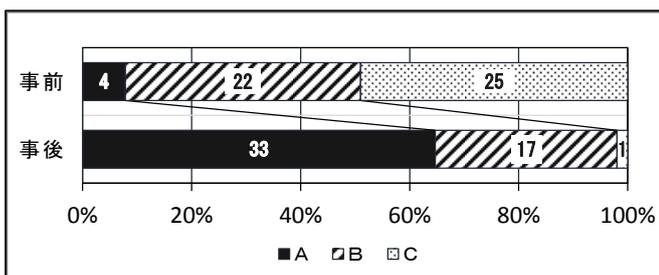


図7 事前・事後テストの結果

図7は表3の判断基準を基に、評価した結果をグラフにしたものである。評定Aの児童が、事前・事後を比較すると増えていることが分かる。

事前テストC評定から事後テストA評定になった児童aの記述内容を図8に示す。事前テストでは、表したい思いは「キレのある感じ」であり、表現の工夫について、高い音を出すことが、キレがあると記述しており、妥当性がない。事後テストでは、自分の表したい思いが「はずむような感じ」であることから、タンギングをはっきりつけること、楽器の組合せ、強弱や速度のことなど、音楽を形づくっている要素の働き方を試行錯誤させて工夫を考えているので妥当性がある。

これらのことから、思いや意図をもって表現を工夫する力は育成できたといえる。

#### 《事前テスト》

表したい思い：できるだけキレのある感じ

表現の工夫：高い音を出すようにしてキレがあるところをしかりする。

#### 《事後テスト》

表したい思い：はずむような感じ

表現の工夫：タンギングをはっきりつける。2つに分かれているので、間違えずに演奏する。リコーダーや鍵盤ハーモニカなど、明るい感じの楽器を使い、リズムや強弱をつけて工夫する。速くても遅くてもだめ、速度を考える。

※実線( )は表したい思いの言葉、( )は音楽を形づくっている要素、( )は表現の工夫の具体

図8 評定Cから評定Aになった児童aの記述の変容

#### (2) 事前・事後アンケートによる分析

音楽の授業において、「こんなふうに歌いたい」「こんなふうに演奏したい」という考えや願いをもち、自分なりに表現を工夫することについての意識調査の結果を図9に示す。自分なりに工夫することについて肯定的に回答した児童が事前では43%であり、そのうち、表現の工夫についての具体を記述させた内容が妥当である児童は32%であった。これは、表したい思いはあるが、音楽を形づくっている要素

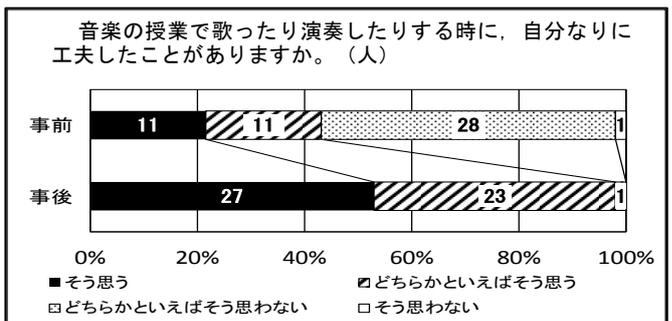


図9 事前・事後のアンケート結果

の働かせ方を使って表現の工夫ができなかったといえる。しかし、事後では、肯定的に答えた児童が98%となり、そのうち、記述内容が妥当である児童は94%となった。このことから音楽を形づくっている要素の働かせ方を試行錯誤させながら曲想にふさわしい表現をつくりあげていく力が育成できたといえる。

## 2 振り返りを充実させた題材モデルは、思いや意図をもって表現を工夫する力の育成に有効であったか。

### (1) アンケートによる分析

図10は、事後のアンケートを基に、児童の意識をグラフに表したものである。

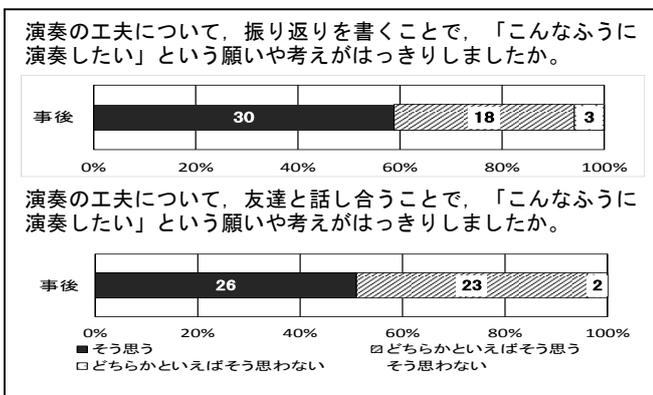


図10 事後アンケート結果

図10から、振り返りや友達との交流を取り入れたことは、児童の思いや意図を明確にすることに有効であったと捉えることができる。しかし、否定的な回答をした児童が数名おり、表現を工夫する過程における個に応じた指導が不十分だったと考える。

図11は児童の記述の具体である。振り返りが表現についての気づき、点検、評価、修正、目標設定として役割があったことが分かる。

設問「振り返りはどうして必要だと思いますか。」についての肯定的解答の理由記述

〈Keep, Problem との関連の記述〉

- 自分の悪いことやよいことなど振り返ってよく分かる。
- 次にやるときに振り返りがなかったら工夫したところやがんばったことが分からなくなるから。
- 振り返りがないと、どこを直せばいいのかどこがよくなったのか分からない。

〈Try との関連の記述〉

- 振り返ったことを生かしながら、めあてをきめられるから。
- 次の授業で直したり、生かしたりすることができる。

〈Keep, Problem, Try との関連の記述〉

- うまくできたところとできなかったところがはっきりして、次に直せばよくなるのが分かりやすい。

〈友達の交流との関連の記述〉

- グループで話し合うと自分以外のことも分かる。
- 友達の意見が分かり、比較することができるから。

図11 アンケート設問の回答に対する理由

### (2) KPTシートによる分析

KPTの視点を活用したKPTシートについて、第四時の楽曲「小さな約束」では音楽を形づくっている要素を試行錯誤させて音楽表現をしようとしている記述が32名であったが、第九時の楽曲「リボンのおどり」では49名になった。その中で、KPTシートの記述から、思いや意図が明確になっていったb児の記述を図12に、c児の記述とグループでまとめたグループのTryを図13に示す。

時	KPTの記述
第四時	Try: ソ#がふけるようになりたい。
第六時	Try: リズムを覚えて、もっとうまくなりたい。
第七時	Problem: やってみると思ったよりリズムがとれない。 Try: 少し楽器をかえてためしてみたい。
第八時	Keep: ばちを変えていい音が発見できた。 Try: 強弱をつけて、おどっているところを伝えたい。
第九時 発表	町の人がゆかいにおどっている様子を考えてえんそうしていくと、ばちの音があっていたから、コンガを太鼓のばちでたいてえんそうした。

図12 b児のKPTシートの記述

b児は楽曲「小さな約束」の時には、リコーダーを正しく吹くことにこだわり、表現の工夫についての記述は見られなかった。楽曲「リボンのおどり」を練習し始めた時は、うまく演奏することにこだわっていたが、KPTシートに「楽器をかえてためしてみたい。」と記述したところから、b児は音色にこだわり、コンガを色々なばちで試しながら、自分の思いに合う音色を探していた。第九時の記述から、自分の明確な思いや意図をもって表現していることが分かる。

c児は、第三、四時の「小さな約束」を演奏する場面では、うまく演奏できるかどうかの記述になっており、表現の工夫について音楽を形づくっている要素と関連した記述は見られない。しかし、第六時の「リボンのおどり」を演奏する場面では、木琴や鉄琴など実際に楽器の音色で試しながら、楽器の組合せを考え、音色についてよかったところとうまういかなかったところを記述している。c児のTryはProblemの組合せの問題点から考えている。第七時の表現を工夫する場面では、旋律の重なり、強弱について振り返っている。問題点としてリコーダーの音が聞こえないことを挙げ、Tryのところで改善案を考えている。発表の段階になると、自分が表したいことが明確になり、自分の思いと音楽を形づくって

楽曲「小さな約束」	第三時	Keep: 2つパートの1段目と2段目まできれいにみんなふけていた。	Try : ゆっくり合わせる。
		Problem: 3段目, 4段目がばらばら。リズムが速い。	
	グループでまとめたTry ゆっくり合わせ, やさしくふく。		
	第四時	Keep: 今日のTryができた。	Try : つながるようにしたい。
Problem: まちがえてしまった。			
グループでまとめたTry いろんな感じの音色でつながるようにふきたい。			
楽曲「リボンのおどり」	第六時	Keep: 木琴とキーボード組合せがよかった。	Try : 他の組合せで, いい組合せを見つけたり, 強弱をつけたりした。
		Problem: 鉄琴はかたい感じのキーンいう音だからあまり合わなかった。	
	グループでまとめたTry 他の楽器の組合せにしたり 強弱, 音の長さなどを工夫したりする。		
	第七時	Keep: いいところは1番目がリコーダーでその後少しずつふえていって, 最後に全部の楽器がいっしょにするのがいいと思った。	Try : 他の楽器の音を小さくする。
Problem: リコーダーの音が小さいので消えてしまう。			
グループでまとめたTry リコーダー以外の音を小さくする。 最後の部分を合わせる。			
発表	第九時	最初は少人数でおどっていて, 後から人がどんどん増えて大勢になるから, 最初は少し弱めのリコーダーが消えないぐらいの音の大きさにして, 最後はにぎやかにした。	

図13 c. 児のKPTシートの記述とグループのTry

る要素と関わらせて, 表現を工夫していることが分かる。このことから, 楽曲「小さな約束」の時には, 児童の思いは正しく演奏することであったが, KPTシートやグループの交流によって, 音色や旋律の重なり, 強弱を試行錯誤しながら, 曲想にふさわしい音楽をつくり上げていきたいという思いに変わっていったことが分かる。

以上のことから, 「KPTサイクルタイム」を位置づけ, KPTシートや学習形態を工夫し指導を行ったことは, 思いや意図をもって表現を工夫する力の育成に有効であったといえる。

## VI 研究のまとめ

### 1 研究の成果

器楽の学習において, 振り返りを充実させた題材モデルを作成し, 題材モデルに基づいた指導を行うことは, 思いや意図をもって表現を工夫する力を育成することに有効であることが明らかとなった。

## 2 今後の課題

振り返りを充実させていくために, 時間の確保が必要である。繰り返し行うことで, 時間短縮を図ることも考えられるが, 指導すべき内容を焦点化し, 授業を行っていかなければならない。また, 本研究では, 検証授業後のアンケートにおいて, 表現の工夫について思いや意図を十分にもつことのできなかつた児童がいた。表現を工夫させる過程において, 個の状況を的確に把握し, 個に応じた支援を行っていく必要がある。さらに, 器楽だけでなく歌唱や音楽づくりなど他の領域での振り返りを充実させた題材モデルを作成したり, 学年に応じたKPTサイクルタイムの方法について, 研究を進めたりしていく。

### 【注】

- (1) 大熊信彦(平成25年):『中等教育資料 10月号』ぎょうせい p.53
- (2) 植阪友理(2010):『現代の認知心理学5 発達と学習』北大路書房 p.173
- (3) 天野勝(2013):『これだけKPT』すばる舎リンケージ p.6
- (4) 津川裕(平成22年):『各教科等での「見通し・振り返り」学習活動の充実』教育開発研究所 pp.67-68

### 【引用文献】

- 1) 文部科学省(平成20年):『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社 p.51
- 2) 文部科学省(平成20年):前掲書 p.57
- 3) 文部科学省(平成20年):前掲書 p.57
- 4) 文部科学省(平成20年):『中学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社 p.28
- 5) 松本徹(2009):『最新 初等科音楽教育法 小学校教員養成課程用』音楽之友社 p.60
- 6) 小原光一(2008):『小学校 音楽科 新学習指導要領ガイドブック ポイントと事例』教育芸術社 p.44
- 7) 市川伸一(平成26年):『初等教育資料 4月号』ぎょうせい p.14
- 8) 三宮真智子(2008):『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』北大路書房 p.9
- 9) 市川伸一(1996):『認知心理学4 思考』東京大学出版会 p.161
- 10) 天野勝(2013):前掲書 p.34
- 11) 天野勝(2013):前掲書 p.44
- 12) 佐藤真(平成26年):『初等教育資料 4月号』ぎょうせい p.10